人と人との触れ合いの中で甦る力

仲嶺　真弓

4 月 22 日の朝、出勤前に見ていたテレビのニュースに涙がこみあげてきました。4 月 14 日に起こった熊本地震に関するニュースでした。前日までは、14 日以降続く余震の恐怖や行方不明者の捜索、食料不足の話が連日報道され、親戚や知り合いが熊本にはいない私でも避難所や車中泊を余儀なくされている人々の気持ちに思いを馳せると胸が苦しく居た堪れない思いでいました。けれど 22 日のニュースは少し違っていました。避難所で過ごす小中学生が、自主的に自分たちができることをしようとボランティア活動をしている様子が映し出されていました。見ず知らずの人にお弁当を配る子、“スターボックス”と称した珈琲が飲める場所で珈琲を入れ配る子、お年寄りの肩たたきをする子、食事の配膳を手伝う子、プールの水をトイレの排水用にとバケツで運ぶ子、物資が行き渡らない場所に自ら自転車で配達に行く学生の姿を見て、心が熱くなりました。大人社会ではいろんな職業に就く人がいて、それぞれの場所で働くことで社会を支えています。熊本の子どもたちは避難所という小さな社会の中で、見事に
大人社会と同じような役割をそれぞれが果たし支え合っていると思いました。行動を起こした子どもたちの表情から“生きる力”を感じました。そんな子どもたちとの関わりに大人が癒され、表情も和らいでいく瞬間を映像は捉えていました。一人暮らしで家に居るのは怖いからと避難してきたけれど避難所の中でさえも孤独が続いていたお年寄りが、「一人じゃないんだと思えました…。」と呟きながら泣いていた姿が心に焼き付きました。報道の最後に、なぜこんなことを始めたのかとアナウンサーが子どもたちに質問していました。一人の女の子が答えました。「自分ができることをしたい。誰かの役にたちたいから。」この言葉を聞いてこれからの未来を託せる子どもたちがたくさんいることを実感しました。

災害はいつ、どこで起こるかはわかりません。この熊取の地でも何かが起こるかもしれません。その時、大人の私たちはどんな行動をとるのだろう…？　子どもたちは…？

熊本の女の子の言葉を思い出し、日々の自分を振り返り考えました。「自分は熊本の子どもたちに恥じないような生き方をできているのか？！」この問いは、永遠に考え続けるべきことなのだと思います。

災害があるたびに思うのは、人は人との触れ合いの中で生きる力に変えていけるのだと感じます。一言でも言葉をかわす…そんな触れ合いが支え合えることに繋がるのだと思います。それはきっと日々の生活の中でも少しずつ重ねていけることだと思うので、つばさ共同保育園が、子どもも大人も、生きる力に変えていける気持ちを育みあうことができる一つの場所になることを願いながら、一日も早い熊本の復興を祈りたいと思います。

お知らせ

(4 月号のお詫び)

つばさっ子 4 月号 2 ページ掲載のアトム共同福祉会理事の紹介部分で誤りがありました。

正しくは以下の通りです。

正しくは

山本健慈　非常勤理事　和歌山大学学長　⟶　一般社団法人国立大学協会専務理事

(人事)

調理員の西川藍が体調不良のため退職いたしました。

4/6 より阪上忍美が調理員として給食室の仲間となりました（給食室のページも見てくださいね）。

(年間スケジュール変更)

育む会マジックショー　10/ 2（日）×　→　**10/30（日）**

ぞうグループ懇談会　2/11（土）×　→　**2/ 9（木）**